
堂々美女と下僕男子？

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堂々美女と下僕男子？

【Nコード】

N8056N

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

親友の優は人気モデル・カレンの弟。優の紹介でそのカレンさんとデートをすることになった桐原悟。しかし、この美女には裏の顔があつて……。

「堂々乙女と秘密の美女」の続編。

プロローグ（前書き）

読者の皆様へ

この作品には未成年者の飲酒・喫煙のシーンが登場しますが、未成年者の飲酒・喫煙は法律で禁止されています。筆者は未成年者の飲酒・喫煙を認めているわけではありません。また、設定上リストカットという言葉が登場しますが、筆者はこのような行為を認めているわけではありません。

詳細な描写はしておりませんが、不快に思われる方がいらっしゃるかもしれないので、前書きとして書かせて頂きました。問題なければ続けて本文をお読みください。

プロローグ

俺の名前は桐原悟。大学の工学部で建築を学ぶ一年生だ。入学したときは親友の栖川優と

一緒の大学に通える喜びで一杯だった。それが前期の間は波乱の連続。

ワケあって女装していた優に間違った感情を抱いていると勘違いされたり、記憶喪失になった優の初恋の相手を助けたり。そして何と言っても気の強い女王様に出会ってしまったこと。これが一番の衝撃だろう。

彼女の名は栖川佳恋。優の姉にしてスタイル抜群の人気モデル。正直、彼女を狙う男は多いだろう。悪いことは言わない、彼女には近づくな。名前はカレンでも中身は可憐じゃない。彼女の本質はこの俺がよく知っているつもりだ。

親友の優に嵌められ（？）、見事彼女の「彼氏」の椅子を勝ち取ってしまった俺は、彼女の「強さ」と周囲の羨望の眼差しに苦しむことになった。

再度忠告しよう。綺麗な花には棘がある。遠くから眺めておくのが一番良いのだ。

出会い

「ダブルデート？」

「そう、悟にお願いしたいんだ」

優の初恋の人・神楽鈴音が記憶喪失状態にあったとき、優はそんな提案をした。

「彼女と僕と悟、そして姉さんの四人で、温泉にでも行こう」

「姉さんって…佳恋さん？」

「この間約束した通り、紹介するよ。悟は性格良いから姉さんと上手くやれると思うんだ」

「人気モデルとデートなんて恥ずかしいな」

温泉旅館は親父が建設に関わったところだから安くしてもらえた。俺は優とゆつくり温泉に浸かっていろいろと話をした。

「佳恋さん、やっぱり美人だなー」

「そうかな、見慣れてるからわからないや」

「優とよく似てるよな」

俺は露天風呂に浸かる優の姿を見て驚いた。湯気の向こうに長い黒髪が艶めいて、女かと錯覚してしまいそうだ。

「なんで目をそらすんだよ、悟」

「なんだか勘違いが起きそうだ」

「いい加減慣れろって…。こっちまで恥ずかしくなるじゃないか。

あーあ、髪切ろうかなあ」

「髪は切らない方がいいんじゃないか？似合ってるし」

「そうだな。親友の言葉だから信じるよ」

「あはははは」

二人で笑いあっているうちに、少しのぼせてしまった。湯冷めしない程度に風に当たってから夕食の会場へ向かった。

夕食は思った以上に豪華。並んでいる日本酒の瓶に惹かれながら

も、未成年と言い聞かせてサイダーを飲む。その隣で浴衣姿の佳恋さんはビール、日本酒、焼酎を飲みまくる。

「悟くんも飲みなよ」

「未成年ですから」

「そんなの関係ないわよ」。さ、次はカラオケよ」

夕食を食べ終えた佳恋さんは俺の腕を引っ張り、カラオケバーに向かった。これが人気モデルの本当の姿なのだ。

カラオケバーでも佳恋さんはウイスキーを飲んだ。僕は烏龍茶を飲みながら、佳恋さんの歌を聞いた。煙草に火を付けようとする佳恋さんが煙草を取り上げた。

「未成年だろお」

「わかりましたよ」

強引に取り返しポケットにしまった。知られたくない。”偽物の煙草を吸っているなんて。

「なんでタバコ吸うのよお」

「半ば中毒なんですよ」

「お酒は飲まないのにい」

「昔飲んでたことはありませんよ。でも、やめました」
「なんでえ」

「ダチが死んだんですよ、イッキして」

「…ごめん」

その顔は酔いが一瞬にしてさめてしまったように見えた。俺は申し訳なくてウイスキーを勧めた。

「気にしないで飲んでください」

「そお…」

一口飲んで佳恋さんは突然寝息をたてた。起きる気配はない。俺はバーが閉まるまで、隣でずっと寝顔を眺めていた。

次の日神楽鈴音の記憶を取り戻す作戦が決行され、最終的には俺の家で記憶を取り戻すことができた。たまたま夜中に起きた俺も貢

献したということで、神楽家から謝礼を頂いてしまった。何だか不思議なものだ。

それが、俺と佳恋さんを結びつけた最初の出来事だった。

世話焼き男と美人モデル

神楽家の一件が解決した後、佳恋さんが飲みに行きたいとメールしてきた。断つても毎日届くので一度くらいならと誘いを受けてみた。

「こんばんは」

佳恋さんは明らかにモデルとわかるドレスを着て待ち合わせ場所に現れた。

「ど、どうも」

「何よ、似合わない？」

目立ち過ぎて恥ずかしいのに、佳恋さんは気づいていないのだろうか。

「似合ってます、すごく」

「どうせ優のほうがかわいいとか思ってるんでしょ」

「思ってますん！」

「全く。男の嘘はすぐわかるのよ」

佳恋さんは俺の手を引いて歩き出した。

「ひとりじゃ面倒だから、ついてきなさい」

店は街で評判の創作料理の店。入ると一人の男性が近づいてきた。

「カレンちゃん、よく来てくれたね。えっと…彼は？」

「マネージャー兼恋人の悟くんよ」

「恋人？」

「マネージャーに恋するなんて、モデル失格よね。でも私、モデルより彼のお嫁さんになりたいの」

「そ、そうか。まあ、入りなさい」

似合わない高級スーツ、指には大きな宝石が並び、首にはゴールドのネックレス。典型的な成金社長といった感じた。要するに、佳恋さんはこの男と飲むのが嫌で俺を呼んだのだ。利用されているよ

うな気もするが、こういう薄汚い奴は俺も好きじゃない。文句は後にして今は協力してやろう。

俺は強引に佳恋さんの横に座った。社長は仕方なく佳恋さんの向かいに座る。セクハラなどしようものなら、俺が許さないぞ。一応恋人のふりをしているんだから。

男はというと高級な料理を大盤振る舞い。佳恋さんはほんの少しつまむだけで、ちよūdお腹を空かせていた俺がガツツリ頂く。情けない表情をする成金男は無視だ。

「カレンちゃん、今度のうちの会社のポスターなんだけど、水着を着て…」

とうとう男は商談を切り出した。水着姿が狙いか。佳恋さんは俯いている。俺はさつき佳恋さんが「マネージャー」と紹介したことを思い出して言った。

「お断りします」

「悟くん？」

「あなたの会社、水着メーカーじゃないんでしょう？別に水着着る必要ないですよ」

「でも、夏らしいイメージが…」

「Ｔシャツにショートパンツでも、ワンピースでも、夏らしいものはいくらかもあるでしょう」

「ならおたくに仕事は回さないぞ」

「構いません。行きましよう、佳恋さん」

「えっ、でも」

「佳恋の水着姿は俺だけのものだ」

俺はキスするふりをして店を飛び出した。顔から火が出るほど恥ずかしかったのは言うまでもない。

「ちよつとお、何てクサイセリフを吐くのよ。気持ち悪い。」

「すみません、なんか許せなかったんで」

「仕事減っちゃうな。あそこの会社、かなり仕事回してくれてたのに」

「すみません。断らない方がよかったですか？」

「いえ、断ってくれたことには感謝するわ。あんな仕事、受ける気なかったから。でも、何で私の考えがわかったの？」

「佳恋さんは極端に露出度の高い服は着ません。きっと理由があるんでしょう」

「…よく見てるわね。勘の鋭い男は嫌われるわよ」

佳恋さんはそう言っていると俺の手をとって歩き出した。

「飲み直しましょう」

「お酒は飲みませんよ」

「いいのよ、隣に座っててくれれば」

二軒目を出たときには0時を過ぎていた。佳恋さんはタクシーでマンションまで送ってくれた。

「また、付き合ってくれるかしら？」

「ええ、まあ」

「じゃあ、お休み」

タクシーが走り去って、俺はようやく息をつくことができた。部屋に帰ると、すぐに眠りについた。

「優、悟くんもらっちゃっていい？」

唐突にアパートへ泊まりに来た姉さんが言った。

「なんでそんなこと聞くわけ？」

「だって、優のこと見てるときと私を見てるときの目、全然違うんだもの」

「変なこと言わないでよ」

「ふふ、私は優よりも先に本当の悟くんを探してみせるわ」
姉さんはいつになく燃えているようだった。

世話焼き男と過去を知る男

「…朝？」

カーテンから光が漏れている。時計は6時を指していた。珍しく熟睡できたらしい。今日は日曜日。KAGURAのオフィスで店舗リニューアルの話し合いをする予定だ。

台所へ行ってコップに水を注ぐ。一口含んで吐き出す。朝は苦手だ。何も口に入れたくない。机に図面を広げ、朝日の中で見直しているとチャイムが鳴った。

「おはようございます。私です」

インターホンの画面には鈴音が映っていた。

「鈴…早すぎないか？まだ6時半じゃないか」

「モーニングコーヒーを一緒にと思って」

「俺が起きている保証なんてないだろ」

「以前おじやましたときも朝が早かったでしょう？」

「そうだったな。車は？」

「またバイクに乗せてください」

「ここまで歩いてきたわけじゃないだろ」

「社名入りの車で移動するのは好きじゃありません」

「わがままなお嬢様だな。待ってる」

俺はエントランスに鈴音を迎えに行った。

「待ったか？」

「いえ」

「何で優を誘わない？」

「優さんのアパートには佳恋さんの車がありましたから、きっと泊まっていらっしゃるのでしょう。」ご迷惑になると思いました」

「俺はいいってことかよ」

「そういう意味では…」

あたふたする鈴音がおもしろい。

「冗談だよ。ほら、乗れよ」

俺はバイクを走らせた。

喫茶店で鈴音はモーニングセットを注文した。俺はコーヒーを頼んだ。

「悟さんはコーヒーだけでいいんですか？」

「うん。俺はパン食べたから」

俺は嘘でごまかした。

「そうですか、ならよかったです。」

鈴音が新聞に目をやる。俺は煙草に火をつける。

「どうして偽物の煙草を吸われてるんですか？」

「…未成年だからだよ」

俺は煙を吐き出した。

「嫌な臭いはあまりしませんね。ニコチンは入ってないんでしょう？」

「そういうこと」

モーニングセットが運ばれてきた。俺は煙草を灰皿に押し付けた。

「だからって煙じゃ食事がまずくなるからな」

「本当に悟さんは気配りのできる方ですね」

「は？」

「悟さん、初めは怖い方かと思っていました。でも、本当はとても優しいんですね」

「んなこたねえよ」

俺はコーヒーカップに口をつけた。

「熱っ！」

喫茶店を出て、オフィスで話し合いを重ね、オフィスを出たのは夕方だった。俺は雑誌でも見ようと本屋に入った。そこで、俺はある男と目が合った。

「桐原…？」

「常盤先輩…?!」

「この街にいたのか…。元気そうだな。遠藤のことがあって以来じゃないか」

俺は聞き終えないうちに踵を返した。会いたくもない奴と会ってしまった。急いで店を出てバイクを走らせた。

部屋に戻って電気もつけずに煙草を吸った。落ち着かない。遠藤…俺の頭を離れないその名前。狂ったように、机の上に広げていた製図用のペンや紙を払う。ペンケースを漁り、ひんやりとした金属の物体を掴む。手の内のカッターナイフを見つめる。腕時計とリストバンドを外す。手首に残る傷痕。躊躇することなく俺は傷を重ねた。床に血が落ちる。しばらくそれをじっと眺めていた。

どれほどの時が過ぎたかわからない。ケータイが鳴って俺は飛び上がった。しかも電話だ。流れる血もそのままに、俺は一呼吸おいて電話に出た。

「もしもし…」

「悟くん? 佳恋だけど、今ヒマ?」

「え…」

「良かったら晩御飯一緒にしない?」

「はあ…」

「マンションで待ってて。美味しい料理作ってあげるから」

そこで電話が切れた。まずいことになった。早く部屋を片づけなくては! 俺は床を拭き、落ちたものを片付けて、皿を洗った。腕時計とリストバンドで傷を隠す。

しばらくしてチャイムが鳴った。

「いま迎えに行きます」

エントランスにはスーパールの買い物袋を下げた佳恋さんがいた。

「お待たせしました」

俺は買い物袋を手に取り歩き出す。

「いいのよ。今日はオムライス作ってあげる」

「オムライス?!」

何となく赤いものは避けたい。具合が悪くなりそうだと。

「嫌?」

「別に…」

「はつきり言いなさいよお」

「す、すみません。できれば別のものが…」

「わかったわ。じゃあ親子丼にしましょ。私が作るんだから、残さず食べてよ」

部屋のドアを開ける。

「どうぞ」

「なによこれ。汚い部屋ね。家具はめっちゃ良いものののに、もったいないわよ」

この間鈴音にも言われたことだが、俺は片付けが苦手なのだ。今はまだ良い方だと思うのだが。

「すみません」

「台所使っわよ」

「よろしく願います」

俺はベランダで煙草を吸った。ハーブで作られた煙草は俺の精神安定剤だ。

「また煙草吸って」

台所から佳恋さんが言う。

「中毒なんです」

「中毒なら治しなさいよ」

そんな押し問答をしているうちに親子丼ができた。俺は部屋に戻り席に着いた。

「おいしそうですね」

「私が作ったんだから美味しさに決まってるでしょう」

佳恋さんは胸を張って言う。

「いただきます」

俺はさっそく一口食べた。

「美味しいです」

「当たり前よ」

そして佳恋さんも続けて食べ始めた。

「ねえ、家の中でも腕時計外さないの？」

「ええ、まあ」

まずいところに気づかれてしまった。腕時計を外せばリスカの痕が見えてしまう。

「そのリストバンドもお気に入り？」

「そうです」

両手首に残る傷痕。それを見られるわけにはいかない。

「ふうん」

佳恋さんはそれほど関心がないようで、俺は一息ついた。

「本当に美味しいです。わざわざありがとうございました。」

「いいのよ。私が勝手に押し掛けたんだから。さーて、今夜は泊まるか！」

「えっ、それは…」

「何よ、泊まつちゃだめなわけ」

「普通駄目でしょう」

「そうか、ちえっ」

なぜか残念がる佳恋。本気かわからないところが怖い。

「じゃあまた作りにくるわ」

「よろしく願います」

そう言つと佳恋は膨れっ面をやめた。

「来週はとうとうKAGURAの新作発表会よ。悟くんは新店舗紹介で大変だろうけど、ちゃんと私のこと見てよね」

「わかりました」

「それじゃ」

「エントランスまで送ります」

「そうね、お言葉に甘えるわ」

外に出ると、空はすっかり暗くなっていた。どこかで花火をする音も聞こえる。佳恋さんは車に向かって歩いていく。その先に見覚えのある顔を見つけた。

「常盤…」

目が合った瞬間、常盤は走り出し、すぐに闇に消えてしまった。俺の行動はチェックされているのだろう。

「面倒なことになったな」

堂々美女の勘は鋭い

一週間が過ぎ、KAGURAの新作発表会が開かれた。優と佳恋さんはモデルとして登場、俺は新店舗のコンセプトを紹介することになっていた。しかし、図面の確認に手間取り、指定の時間には到着できなかった。

「新店舗のデザイン、できたぞ」

「ありがとうございます」

鈴音が図面を受け取った。

「本当に俺でよかったのか？一応親父に細かいところはみてもらったけど」

「素敵です。開店が楽しみですね！」

今、鈴音は社長として新しい商品のデザインや、新店舗の設計に大忙しだ。元々父親の仕事を手伝っていた鈴音だから衣類のデザインは得意だ。客からの受けもいい。

「悟くん、仕事が終わったなら飲みに行きましょうよ」

仕事を終えた佳恋さんが話しかけてきた。

「佳恋さん、俺は未成年だけど」

「未成年のくせにタバコ吸うな」

佳恋さんは俺の煙草を取り上げた。最近お決まりのパターンになっている。

「タバコは男の嗜みなんだよ」

俺は煙草を取り返すが、佳恋さんも負けてはいない。

「どうせ酒も飲んでるでしょ、つべこべ言うな！」

すると今度は鈴音が割って入ってきた。にこにこと笑って、俺の方を向く。

「私知ってますよ。そのタバコ、偽物なんですよね！」

「偽物？」

佳恋さんが大声を上げた。俺もその言葉に驚いた。

「鈴、それを今バラすな！」

「嘘っ、てつきり本物だと思ってたわ」

「本物吸ってたらとづくに捕まってるさ」

俺は隙を突いて偽物の煙草―禁煙者向けのハーブ煙草に火を付ける。

「そうかしらね。単に老けて見えるだけじゃないの？」

佳恋さんは俺の肩をつかんで離さない。

「優、佳恋さんを何とかしてくれ」

「自業自得だよ、悟じいさん」

優も調子にのっているようだ。

「わかったわよ、悟おじさん。これから私が美味しい抹茶カフェに連れて行ってあげる。はやく準備して」

佳恋さんはずっと俺の腕を引っ張っている。

「俺が抹茶苦手なの知ってますよねえ」

「知ってるに決まってるじゃない」

佳恋さんはにこやかに笑っているが、こちらはたじたじだ。

「佳恋さんってSなんですか？」

「栖川だもの」

「イニシャルの話じゃない！」

俺はは顔を赤くしてつつこんだ。

「鈴音は仕事に戻る？」

「今日は帰ります。そうだ、皆さんで焼き肉パーティーなんてどうですか」

「賛成！抹茶より焼肉にしよう。」

真っ先に俺は手を挙げた。

「じゃあ行きましょう！KAGURA新作発表会のお祝いです！」

「って、何で俺の家なんだよー」

会場は俺のマンションだった。とても広い部屋だから、こういう機会に使わなければ勿体ないと鈴音はいう。余計なお世話だ。

「早く焼けよ、悟じいさん」

「そうよ、悟くんが焼かないと私たち食べられないんだから」

「みんなで焼けばいいじゃないか。鈴も説得してくれ。」

「社長命令です、悟くんが全部焼いてください。」

「ひどい、みんな揃ってSだ」

「鈴音ですから」

「だからイニシャルの話じゃないって。それに、もしイニシャルの話なら、俺だって悟だからSじゃないか」

「悟さんのSはカウントしてません」

「なんでだよー！」

そう言いつつも食事を楽しんでいた俺はきちんと肉を焼いてやった。こんなに楽しい食事会なら、また部屋を貸してもいいだろう。ほら、食べ。食べよ！俺の飯が食べないっていうのかー」

「悟くんもSだなあ」

完全に佳恋さんは酔っぱらっている。

「いけない、資料をオフィスに忘れていました。私はそろそろ失礼しなくては」

鈴音が言った。

「優、付き合ってあげなさいよ。片付けは私と悟くんで行っておくから」

酔いをさましながら

佳恋さんが言う。

「いいの？姉さん」

「いいのいいの。ね、悟くん」

「はあ……」

「じゃあ、先に帰るね。」

後片付けは佳恋さんと分担してやることにした。

「悟くんも皿洗い手伝ってよ」

「はい」

俺が皿に手を伸ばすと、佳恋さんは顔をしかめた。

「ちよつとお、時計外しなさいよ」

「えっ……」

「それからリストバンドも。水がかかるでしょ」

抵抗してもしようがない。俺は覚悟を決めて二つを外した。佳恋さんがこちらをじつと見ている。

「ふうん、それを隠していたわけね」

佳恋さんの力強い目は全て見通してしまいそうだ。正直に答えることにした。

「……すみません」

「いつから？」

「中学のころから」

「最近もやったの？」

「はい」

「そお……」

呟いて佳恋さんは洗い物を始めた。

「何でリスカ？」

「……友達が酒で死んだこと、思い出すとどうにもならなくて。あれ、俺のせいでもあるから。」

「そっか……それは辛いね」

今度は手を止めると俺の両手を掴んだ。

「辛いのにこんなことを言うのは酷だけど、悟くんが自分を傷つけて、その友達は幸せかな？」

「……」

返す言葉もなかった。佳恋さんは続ける。

「悟くんもわかってるんだよね、そんなことは。でも、辛くて苦しくてやってしまうのね」

急に佳恋さんが力を込めて俺を抱き寄せた。驚いて言葉も出ない。「それを見る私も辛いよ。私にできることがあれば、何だってする。：そうね、まずは今日、ここに泊まって行く必要があるわ。」

「え？ちよ、ちよっと」

強引な展開に俺は驚いた。

「もし今夜、私が帰った後に悟くんがリスカしたら、私責任感じちゃうもん」

「本気ですか？」

「本気よ。安心して、変なことはしないから」

「優には何と説明するんですか」

「悟くんがお腹壊したから看病するって言っとくわ」
断れそうもない。俺は諦めた。

「…わかりました。客間はあちらです」

「何言ってるの？同じ部屋で寝るに決まってるじゃない」

「何ですか！」

「別の部屋にいたら、悟くんがリスカしても気づけないじゃないの」
「でも…」

「優にリスカのこと話しちゃおうかな」

「それだけは勘弁してください。お願いします。」

「じゃあ同じ部屋で寝ましようね」

この人はとにかく強い人だ。綺麗な花には棘がある。まさにそんな感じだ。

「本当にこれでいいんですか？」

部屋の奥にあるベッドに俺が寝て、床に敷いた布団に佳恋さんが寝るという。普通は逆じゃないだろうか。

「私がここに寝れば、悟くんは簡単に外に出られないでしょう。夜中に部屋を出てリスカされたら嫌だもの」

「徹底してますね」

「そりやそうよ。弟の大事な友達、死なせるわけにいかないからね」

佳恋さんにはパジャマ代わりにジャージを貸した。0時過ぎ、電気を消す。

「おやすみ、悟くん。そうだ、眠るまで手をつないでいてあげようか」

「だ、大丈夫です。」

急いで布団をかぶり、寝たふりをする。

「おやすみ」

佳恋さんも布団に入ったようだ。俺は目をゆっくり閉じた。

2時過ぎに目が覚めた。佳恋さんはぐっすり寝ているようだ。言っていた通り、これでは部屋を出られない。手が震えている。布団にくるまって何も考えないようにしていたが、苦しい。常盤は俺を監視している。俺のせいで遠藤は死んだ。俺のせいだ。

温かいものが手に触れて、俺は驚いた。

「眠れないの？」

「目が覚めてしまっただけです」

「手、握ってようか」

「…恥ずかしくないんですか」

「別に、小さいころからよく優と手を繋いでるから」

返事をしなかったのに、佳恋さんは手を握り続けた。そして気づいたときには朝になっていた。隣に佳恋さんの姿はない。もう帰ったのだろうか。部屋を出てみると、佳恋さんは朝食を作っていた。

「おはよう、悟くん」

朝からテンションの高い人だ。

「俺、朝食食べないんですけど」

「食べないと優にばらすわよ」

完全に脅迫だ。従わざるをえない。

「何年ぶりだろう」

俺は朝食の席についた。

朝食を終えると佳恋さんは帰る支度を始めた。

「本当にありがとうございます」

「ふふふ。また泊まりにくるわよ」

佳恋さんをエントランスまで見送る。車が出てしばらくすると、木の陰から常盤が現れた。

「あれ、モデルのカレンだね？彼女なわけ？」

「先輩には関係ないことです」

「もう忘れちゃったんだな、事件のことも、遠藤のことも」

「勘違いするなよ。遠藤と俺は付き合ってたんだ…」

「はいはい、わかりましたよ」

「先輩こそどうして今、遠藤のことを…」

「お前は変わったのかもしれないが、事件は、あの日から何も変わっていない。そのことを忘れるな」

そう言うとき常盤は歩いていった。怪しげな黒い車が遠くで待っていた。

堂々美女は決断す

その日私は悟くんの家を出てまっすぐ駅へ向かった。今日は仕事を休み、新幹線で実家に帰ることにした。

「お父さん、お義母さん、ただいま」

父は勤務医で今日は夜勤明けの休みの日。義母は忙しい父をしっかりと支えるため専業主婦をしている。私と優を産んだ母はすでに他界し、父は母の選んだ女性と再婚したのだ。

「佳恋ちゃん、今日は休みだったのね？ちょうどよかった！お父さんと食事にでも行こうって話していたのよ」

「そっか、じゃあ食事しながらゆっくり話ができるね」
「話？」

父が何かを悟ってこちらを向いた。

「そっか、見つかったのか」

私たちは小さなレストランに出かけた。有機野菜を使ったパスタを注文する。

「それで、相手は？」

父が唐突に切り出した。義母はおどろいている。

「もしかして、彼氏？」

「いやっ…たぶん…相手は彼氏だなんて思っていないとか…」

「片思いかあゝ。大丈夫、お母さんが応援してあげるわよ」

「ありがとう、お義母さん」

「で、どんなやつだ？」

「お父さんも知っている人よ。桐原悟。優と仲の良い…」

「ははは、あいつか。不良に絡まれた優を助けたことがある。正義感の強い良いやつだよ」

「彼ともっと話ができるように、しばらく優の家から仕事に行こうかと思っているのだけど」

「佳恋、嘘はいけないよ。できることならもっと彼に近い場所へ行

きたいと思っているんじゃないのか？」

「お父さんには全てお見通しだったようね」

「佳恋の好きなようにすればいい。彼に迷惑をかけない程度にな」

グッドタイミング・バッティング

佳恋は次の日、新幹線で街へと戻ってきた。夕方、悟のマンションのエントランスに行くと、なにやら困り顔の男性が呟いている。

「なんだ、悟はいないのか」

佳恋はすぐに理解した。その男性こそ悟の父親だと。

「悟くんの…お父さま？」

「君はモデルの…」

「初めまして。栖川佳恋といいます。悟さんと仲良くさせて頂いております」

「悟にもついに彼女ができたか…」

満足げな表情を浮かべる男性を見て佳恋は困惑した。

「いえ…あの…まだ彼女とは認めてないと思いますけど」

「そうか…まだあのことを気にしているのか」

一転して男性の表情は曇ってしまった。しかしそれが真実だ。

「あのこと？」

「合鍵はあるから、部屋で話すでしょう。あなたがもし、これからも悟と仲良くしてくれるのなら、ぜひ聞いておいてもらいたい話だ」

部屋に入り私はコーヒを淹れて悟くんのお父さまに出した。

「悟は中学生のころ、かなりのワルだった。毎日のように酒、煙草、喧嘩…手がつけれなかったよ。ただ、ずる賢い奴で、警察に連れで行かれたことはない。警察に捕まらない程度に悪いことをやっていたのさ」

「今の彼からは想像できませんね」

「…悟は変わった。中学二年生の夏、不良グループの女子が死んだときからだ」

「もしかして、アルコール中毒で死んだっていう…」

「知っていたかね。悟は彼女が死ぬ数時間前に会っていてね。自分

がそばにいれば助かったかもしれないと悔やんでいた。だけど彼女の死は……」

「ただいまー。親父来るなら連絡いれろって……」

「悟、今日は彼女も一緒だ」

「佳恋さん?! なんで……」

「ふふふ、来ちゃった」

「親父い、おかしいなと言っていないだろうな」

「爆笑するようなギャグは言っていないぞ」

「そのおかしいじゃない!」

「まあまあ。悟くん、今日は私が夕飯作ってあげるから」

佳恋さんは買ってきた材料で中華料理を振る舞ってくれた。親父は大好物のエビチリに夢中だ。

「ああ、こんなに美味しい料理を作ってくれる人がお嫁に来てくれるなんて幸せなことだ」

「待てよ親父、佳恋さんに失礼……」

しかし佳恋さんは顔を赤くして喜んでいる。

「きゃっ、お嫁さんだなんて」

「佳恋さん……」

「悟くんったら、疎い疎い。私の気持ちを受け止めてくれないのね。」

「

今度は膨れっ面だ。まったくこの人のペースにはついて行けない。佳恋さんはそのまま皿洗いを始めたので俺も手伝うことにした。

「今日は泊まっていくよ。文句ないわね?」

親父の前で何ということをするのだろう。まったく困った人だ。すると今度は親父が口を開いた。

「悟、私も今夜は泊まっていく。よろしく頼むぞ」

「ちよっと待ってくれよ。うちに客間は一つしかないんだぞ」

もう佳恋さんを追い出そうとは思っていないかった。何を言っても聞かないだろうから。

「私は悟くんと同じ部屋でもいいわよ」

「佳恋さん、真面目に考えてください」

「私が不真面目だって言うの？」

「いやっ…そういうわけじゃ」

「悟、彼女に失礼のないよう、ちゃんともてなして差し上げなさい」
親父には俺の部屋で、佳恋さんには客間で寝てもらい、俺はリビングのソファで寝ることにした。

夜、やはり目が覚めてしまった。仕方がないので台所へ行き水を飲む。何だかまた、手が震えそうになる。洗いかこの中の包丁が気にかかる。その時、また温かな手が背中に触れた。

「…！」

「悟、何してる」

それは佳恋さんではなく親父だった。

「喉が渴いたから…」

「そうか。まだリストカットしてるんだな？痕が見える」

「そう…だけどやめることにした」

「それはいい心掛けだが、どうして急に？」

「あの人に見られたからだよ」

俺は佳恋さんの眠る客間を指差した。

「恋人を悲しませたくない」と

「恋人じゃない」

「どうしてそう言えるんだ？」

「彼女にはもつとふさわしい人がいるだろうから…」

「何よ、私の目が節穴だって言いたいのか？」

俺は驚いた。親父の後ろに佳恋さんが立っていたのだ。

「佳恋さん！決してそういう意味では…」

「私！が決定したの。私！が選んだの。私！がふさわしいと思った相手があなたなの。わかる？」

俺は詰め寄る佳恋さんにすっかり圧倒されてしまった。

「ふさわしいかどうかは私！が決めるのよ。ふさわしい相手が他に
いるなんて、あなたに推測してもらう必要はないの。わかったわね
？」

「はい」

「今日からあなたは私の彼氏、わかった？」

「はい」

親父が居ることも忘れ、俺は言ってしまった。しかし、なぜだか
後悔する気持ちにはならなかった。

謎を知る男とヒミツの計画？

翌朝も朝食を作ってくれた佳恋さんは仕事のために部屋を出た。

俺は親父を部屋に残してエントランスまで送ることにした。エントランスを出ると常盤が立っていた。

「…悟を殺して俺も死ぬ」

手にはナイフが握られていた。

「待て、常盤」

「ここ数年リスカばつかしてたらしいな。そんなに死にたいなら死ねばいいだろ」

「俺は死なない」

「そんなこと聞か！」

その時佳恋さんが動いた。

「悟くん！」

「佳恋さん？」

危ない、と言うつもりだったが、その必要はなかった。佳恋さんは素早い動きで常盤に近づくと、一気に投げ飛ばしてしまったのだ。「女だからってなめんなよ！」

「えっと…」

俺は何も言えずに立ち尽くしていた。

「私は昔柔道を習ってたの。優がいじめられてたから、仕返ししようと思ってね」

「仕返し？！それっていいんですか？」

「悪いのはどっちよあ」

「そうですね…」

「それより怪我はない？」

「はい…」

見ると常盤のジージパンのポケットに黒い手帳が入っている。引き抜くとそれは警察手帳だった。

「警察？」

「まったく…話は最後まで聞いてくれよ」

常盤が困り顔で言った。

「どうということだ？」

「俺は遠藤の死の真相を追っていた。今は、遠藤とつるんでいたグループに接触していたところだ。」

「なぜ俺を襲った？」

「あいつらはお前を狙ってた。だから俺は仲間になったふりをして、お前を襲うように見せかけて警告しに来たんだ。でもこれでペアだな」

いつの間にかあの怪しげな黒い車がマンションの前に停まっていた。ドアが開き、三人の男が降りてくる。

「騙したな、常盤。桐原は俺たちで始末する。」

「俺が警官だとしても、知らないってわけね」

「お前みたいな下っ端に何の力がある？」

「ちえっ」

常盤は立ち上がり、戦闘の構えをとった。

「下っ端でもこれが職務ですから」

常盤はナイフ―実はプラスチック製のおもちゃを捨て、素手で怪しい男たちに向かっていった。

三人はあっけなく倒された。一人は常盤によって、そして二人は佳恋さんによって。俺が出る幕などない。

「悟くんを狙うやつは許さないんだから！」

「悟の彼女、すげーな」

常盤はその姿に圧倒されていたが、我に返って男たちを警察へと連行していった。

「詳細がわかったら連絡するから。彼女とお幸せに」

常盤が去り、俺は佳恋さんに頭を下げた。

「佳恋さん、ありがとうございました」

「いいのよ。私、大切なものを守るためなら何でもするの。昔、優を助けようとして作った傷がまだ残ってるくらいなもの。」

「それが水着を着ない理由……」

「そうよ。で、何ブルーになってるの？今度、私が困っているとき助けてくれればいいのよ。」

「わかりました」

「よろしい！」

佳恋さんとはびっきりの笑顔を見せ、車に乗り込んだ。今日は有名ブランドのポスターの撮影らしい。

しばらくして、常盤から男たちが遠藤の死について語ったと連絡があった。遠藤はアルコール中毒ではなく、薬物中毒で亡くなったという。その薬物を提供したのがあの男たちだったようだ。遠藤は俺や常盤に相談するつもりだったらしく、俺が狙われたのは遠藤から秘密を聞いている可能性があるからだそうだ。とにかく男たちは逮捕され、俺の生活にもやっと静寂が訪れた。

下僕男子の日常？

日曜日の朝、五時にチャイムが鳴った。

「悟さん、バイクで漁港まで連れて行ってください。海鮮丼が食べたいのです」

「鈴、急に何だよ……」

俺がインターホンで話をしていると

佳恋さんが起きてしまった。

「鈴ちゃんとはいえ、そんなワガママゆるさないわよ」

「だったら佳恋さんの車で行こう」

「それなら三人で行けますね」

「勝手に話を進めないでよ！私の車よ！私に決めさせなさいよ」

「さ、佳恋さん、行きましょう」

俺がキーを差し出すと、佳恋さんは膨れっ面をしながらも着替えを始めた。

「今日は悟くんの奢りで食べるからね」

これがかの有名なモデル・カレンとその彼氏（兼下僕）の日常だ。綺麗な花に棘があるのは大切なものを守るため。俺はそうやって守られながら生きている。リス力癖はそう簡単に直らないけれどこの人と一緒なら、どんな壁も乗り越えて行けそうな気がする。

「ありがとうございます」

「何よ、車くらいどうって事ないわよ。優も起こして乗せていきましょ」

俺の言葉の本当の意味には気づかなかったらしい。いや、気づかなくていい。

俺達はまだこの先起こることについて、何も知らないでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8056n/>

堂々美女と下僕男子？

2010年10月8日12時12分発行